

## 黒子の仕事はクリエイティブ

ライター&フォトグラファー 神保康子

2008年、4月のプレスセンターホール。

そうそうたる方々が、熱く議論を交わしていました。

「これ以上削れといわれたら、社会保障が死んでしまう。乾いた雑巾をしぼっても水は一滴も出ないのであります！」

尾辻・元厚労大臣が骨太方針に憤慨して、激しく語っておられました。

<http://www.yuki-enishi.com/challenger-d/challenger-d49.html>

「えにしを結ぶ会08」です。

ゆきさんの医療福祉ジャーナリズム分野へ入門してすぐのことで、洗礼のような出来事でした。

私が社会保障という単語を意識したのは、これが、ほとんど初めてのことでした。それまでは、福祉や医療という言葉は使っていましたが、社会保障という言葉が頭に格納されていなかったように思います。

その後、社会保障論、社会保障史などさまざまな授業で、そしてシンポジウムで、社会保障という言葉をつらつら耳にするようになりました。

華々しい歴史とは対照的に、先のことは、とにかく暗い話ばかりでした。

しかし、この30年間ずっと、厚生労働省を支えて来られた伊原先生の「これからの社会保障は？」のお話は、悲観的にならずに、かといって楽観主義でもなく、じっくりと、自分のこととして考えていきたくなる内容でした。

人口構成が大変なことになっていく、社会保障費が膨大になっていくことに対して、「どうしよう」という、立ちすくむような不安から、「それでも逃げない」というスタンスへ、そっと着実に動かしてこられた方々の底力に、畏敬の念を覚えました。

壁にぶちあたっても、それをなんとかしようと思つて工夫することは、伊原先生もおっしゃっていたように、「創造」だと思えます。

多くの支え、日々の細かな調整があり、そして、一つの成功のように見える出来事があるということは、なかなか表には見えません。でも、そのような部分を丹念に見て行かないと、伝える立場としては、方向を誤るような気がします。ジャーナリズム分野の公開講義に伊原先生が来てくださったことは、とても大きなことだと感じております。

大変ご多用な中、放課後までご参加くださって、一つ一つの質問に丁寧にお答えくださいましたこと、心より感謝申し上げます。  
ありがとうございました。